

# たまのよこやま

速報・春の楽しい体験イベント

平成28年度企画展示

好評開催中!!

# 速報!

東京都埋蔵文化財センターの

## 楽しい体験イベント

2016春

2016年の4・5月に行った行事の中から、「自然観察会」、「古代の布作り教室」、「縄文ワクワク体験まつり」を紹介します。

まず紹介するのは、4月9日に行った「**自然観察会**」です。自然観察会は（公財）多摩市文化振興財団との共催事業として、春と秋の2度実施しています。植物に詳しい講師を招き、当センターに併設する遺跡庭園「縄文の村」において、季節の植物を観察します。講師を務めるのは、パルテノン多摩の学芸員で、植物など自然史を専門とする仙仁徑氏です。仙仁氏の丁寧な解説は毎回好評で、植物の意外な一面を教えてください。この春の観察会では、アカシデやシャ



仙仁氏（写真奥）の説明を聞きながらアカシデを観察する参加者

ガ、アセビ、ウラシマソウ、ニリンソウ、カタクリ、ヒメコブシなど、約20種類の植物を観察しました。

続いては、4月23日に実施した「**古代の布作り教室**」を紹介します。現在、私たちが使用している布の大半は織機で作られた織布ですが、この織布は弥生時代以降にもたらされたと言われています。織布登場以前、つまり縄文時代には「**編布**」という編み布が存在していたことが分かっています。この教室では、コースター程の大きさの**編布**を作りました。作業は、まずコモツチに経糸を巻き付けるところから始まります。コモツチに巻いた経糸をアング

ン台に掛けたら、それに直行するように緯糸をあてます。このコモツチを前後に交差さ



せることで、コモツチに巻いた経糸で緯糸をからめて緯糸をから編んでいく

めて編んでいきます。最初は苦労しながら編んでいた参加者も時間が経つにつれ、手付きが慣れていき、最終的には立派な編布が完成しました。

5月3・4日には、ゴールデンウィーク恒例となった「**縄文ワクワク体験まつり**」を開催しました。3日は晴天に恵まれ、この日1日で900人近い参加者がありました。火おこし体験をはじめ、クルミ割り体験、石斧で木を切る体験、弓矢体験、縄文コレクション、さらにはどんぐりアートや縄文アート、勾玉作りの各コーナーは、大勢の参加者で賑わいを見せていました。例年、受付に長い行列ができる勾玉作りは今年も大盛況で、庭園内の各コーナーでは自分で作った勾玉を首からさげた子供たちをよく見かけました。また、縄文服を試着できる縄文コレクションでは、昨年新調したばかりの縄文服が大人気でした。中には縄文服を着たまま、縄文人になりきった気分ですりや石斧の体験をする参加者も見受けられました。（小西絵美）



火おこし体験（左から1・2枚目）、石斧で木を切る体験（左から3枚目）、弓矢体験（右）

# かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方 縄文土器編

縄文土器の文様は、時間的変化や地域差のものさしとなる土器型式を考える上で、重要な手がかりです。「縄文時代」の名の由来でもある縄文(縄目文様)もその一つです。「縄文」には、日本各地で100種を超えるバラエティーのあることが判っており、縄文人の技術と感性の高さを物語っています。

「縄文」とは、草木の茎や繊維などに撚を加えて紙縫状に撚合させた縄(撚紐)を施文具(施文原体)とする文様の総称で、縄の側面を押しつけた側面圧痕(撚紐縄文)や押し付けながら回転させた回転圧痕(回転撚捺縄文=いわゆる縄文)、縄を編み組した組紐を回転施文した組紐縄文、撚紐を断面円形の軸棒に巻き付けたもの(絡条体)で回転施文した撚糸文などが含まれます。

では、縄文は、どんな縄[原体]で、どのように付けられたのでしょうか。今回は、最も一般的な縄文を例に、考えてみましょう。

最も単純な縄の作り方は、同じ撚方向の繊維の束(条)もしくは縄2本を前の撚方向と反対方向に撚合わせることを繰り返していくことです。この方法で作られた縄と、それを転がして付けた文様を比べてみましょう(第1図)。繊維束に撚を加えただけのもの[0段の条]では、転がしても文様は付きません。これを半分に折り返すかもしくは2本用意して、それぞれの撚の強さを保持しながら2本一緒に逆方向の撚を加えると、2本の条は螺旋状に絡みながら撚合されます[1段の縄]。これで初めて縄文を施文することができる縄となります。これを同様に繰り返すことで、2段→3段→4段の縄ができます。

縄[原体]の条の中に米粒状の節が見えるもので、1つの節が連続するものは「単節」[2段の縄]、節の中にさらに節が認められるものが「複節」[3段の縄]、その節の中にさらに節のあるものが「複々節」[4段の縄]と呼ばれます。一方、条の中

に節のないものは「無節」[1段の縄]です。これらを回転施文した縄文は、条の中に原体と同様な節が圧痕として認められ、用いた原体の呼称の後に「縄文」を付して、「単節縄文」「無節縄文」のように表記します。

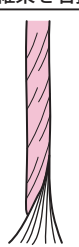
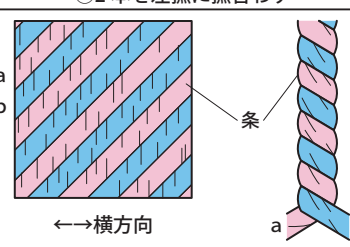
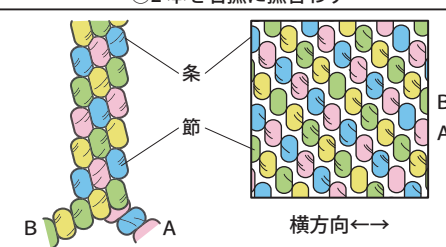
条は、最後の撚りに用いられた縄の本数を反映しており、2本の縄(a・b、A・B)を用いたならば、縄の条だけでなく回転施文された縄文の条にも、1本おきにその縄の特徴が発現します。3本の縄を用いた場合には、2本おきに発現するのです。

次に撚方向ですが、縄の条が左上がりのものは最後の撚方向が左撚(L)、右上がりのものは右撚(R)です。縄文の条及び節の中に観察される線状痕の傾きと節の傾きは、その撚方向を判断する重要な手がかりで、最後の撚方向を示しています。条の長軸に対し、左撚の無節縄文L(第1図②)では条の中の線状痕が左上がりとなり、右撚の単節縄文RL(第1図③)では、節もその中の線状痕も右上がりです。

同方向に回転施文された縄文の条の傾きは、右撚と左撚では90度異なります。つまり、撚方向が判れば、施文の方向も知ることができるのです。

縄の種類だけでなく、施文の方向や順序、その組み合わせなども、その土器を考える上で重要な手がかりです。関東南部では、中期後葉の加曾利E式で、口縁部は横回転、胴部には縦回転による斜縄文が多く見られるのに対し、前期では横回転による斜縄文が主体を占めます。また、早期前葉や中期中葉勝坂式期の後半には、斜め回転で施文され条が縦方向に並ぶ縄文が特徴的で、縦方向に並ぶ撚糸文が同時もしくは直後に多く見られるのも大きな特徴です。

なお、出土する縄のほとんどが1段の縄であるのに対し、縄文には2段あるいは3段の縄によるものが数多く認められることから、縄文施文に用いられた縄は、土器の文様付け用に調整されたものであったと考えられます。(江里口省三)

縄の表記	① [0段] r	② 無節 [1段] L	③ 単節 [2段] RL
撚方向	繊維束を右撚	① 2本を左撚に撚合	② 2本を右撚に撚合
縄と縄文の様子			
回転施文方向		←横方向	横方向←→
縄文の条と節	条は生じない	条は右上がり	条は左上がり、節は右上がり

第1図 縄の構造と縄文からみた撚方向及び縄文の様相

遺跡は八王子市館町にある龍見寺の裏山で、尾根頂上部から四方に広がる斜面部にかけて広がっています。平成27年度の調査は、国土交通省関東地方整備局相武国道事務所の計画する、一般国道20号（八王子南バイパス）建設事業に伴う仮設道路建設部の埋蔵文化財発掘調査で、裏山地区尾根頂上部から東側の斜面部にかけて行ないました。

調査期間は、平成27年10月1日から平成28年3月31日までで、西側をⅠ区、東側の斜面部をⅡ区として、西側から調査を始めました。平成28年度以降はバイパス本体の工事部分を対象に発掘調査を行います。

平成27年度の調査により、Ⅰ区で中世以降（15世紀以降）の長方形の土坑と平安時代以降の粘土分布、縄文時代中期以前と後期（おと）の陥し穴土坑、集石が検出されました。遺物は、縄文時代早期（8,000年前）から中期（5,000年前）の土器、石器、焼礫が出土しました。

尾根東側から南側に傾斜する斜面部のⅡ区西側は崖の痕があり、自然の崩落地形で、下方に平坦な地形が広がっていましたが、立川ローム面まで掘り下げると谷が埋まった状態で検出されました。谷は深

い部分で地表から約5mを測り、地震などによる地層のズレも確認できました。埋没谷の南側斜面には縄文時代の陥し穴土坑が検出され、斜面の下方では江戸時代以降の芋穴や溝、柱穴などの耕作地跡が検出されました。Ⅱ区東側は、西側からの谷の続きも見つかりました。遺構は、江戸時代以降は段切り、溝、芋穴、中世以降の道路跡や硬化面、平安時代以降の溝、弥生時代以降の土坑、縄文時代の陥し穴土坑が検出され、遺物は江戸時代の陶磁器や土器、15世紀前半の陶器や須恵器、縄文時代前期から中期の土器、石器（槍先形尖頭器、打製石斧や石皿など）、焼礫が出土しました。

また、縄文時代中期以前の土坑には、地層のズレの痕跡が検出されてい



により、多くの地層のズレがわかる土坑の壁面成果を挙げるのが期待されます。（小坂井孝修）  
\*表紙は本遺跡の平成27年度調査範囲をドローンにより上空から撮影したものです。



館町龍見寺裏山地区遺跡の調査箇所近景（東から。右上後方には初沢城や八王子城が見える。）

# 大江戸掘りものの帖～ 11 ～

## しゃり砂利のはなし

「たまのよこやま 101 遺跡だより 105」でご紹介した新宿区四谷一丁目遺跡では、現在、廃道となった区道の真下を発掘しています。アスファルトの足下には、町屋開設以来 400 年近く連続と続いてきた道路の歴史が眠っていました。詳しくは後日ご報告するとして、今回は舗装材として使用された「しゃり」に着目してみたいと思います。

発見された路盤の厚みは最大で 50cm 程。江戸初期は路床面に粘質土を均して突き固めただけの路盤構造でしたが、時代が下ると、貝殻混じりの砂利を敷き詰めて路面を舗装する箇所がみられるようになります。この道の東方に連なる外堀通り（旧御堀端通り）で行われた 1 次調査時に発見された道路跡では、堀の浚渫土で路盤を盛土したのち、瓦片や陶磁器片を混ぜた砂礫で舗装されていますが、分析結果から舗装材に一部海砂の混在が指摘されています。これは、正保 5 年（1648）の町触（『正保事録』）にみられる、道の修繕を「浅草砂」に海砂を混ぜて施工すべしという示達に沿うもので、粒径の異なる砂を混和させる現代の粒土調整工法に似た工夫であると指摘されています（新宿区四谷一丁目遺跡調査団 1998『四谷一丁目遺跡』）。

一口に砂利と言っても、その呼称は、粒径や産地、

用途によって様々ですが、道路の路盤材には切込砂利（ふるい分けをしていない砂礫）が多用されていたようです。採掘地は、浅草などの「砂利取り場」、目黒川や大井海岸などの品川、多摩川など河川流域と伝えられていましたが、近年行われた発掘調査で武家屋敷地での土砂採掘跡が発見され、関



旧四谷塩町一丁目町屋を貫く道路跡  
【新宿区四谷一丁目遺跡 ⑦-1 区 001 号遺構】



品川第五台場の土塁盛土【港区品川台場（第五）遺跡平成 26 年度調査地点】

係者の注目を集めました。新宿区南榎町遺跡は、下級武士である御先手鉄砲組与力同心大縄地にありますが、自然堆積の砂礫層まで達した深さに沿って水平に連なる坑道がいくつも見つかり、居住者以外の公的な砂利の採掘地と推察されました。（株式会社四門 2015『南榎町遺跡Ⅲ』）。史料の分析をされた砂利利用に詳しい川名禎さんによれば、道普請を筆頭に、江戸城や台場など幕府施設の公儀普請、藩邸や寺院普請など多くの砂利の需要を背景に、南榎町遺跡の事例は、当時の採掘地が限定されるなか、一時期の普請に供給するために近場での採掘地を求めた結果と見なしています。

品川台場（第五台場）の発掘調査では、幕府の直轄事業の台場普請に海上の埋め立て資材として大量の土砂や石材が投入されていることがわかりました（たまのよこやま 94）。幕府指定の土取り場は、品川御殿山、八ツ山、泉岳寺境内の 3ヶ所とされ、砂利の分析からは、石垣の裏込や土台間には河川由来の砂礫が、土塁盛土には自然堆積の砂礫層由来の切込砂利が使用され、武蔵野面（M面）に属する御殿山の台地からの供給が示唆されています。一方、砂礫と互層をなすローム層～ローム質粘土について、上條朝宏さんは、下末吉面に相当する八ツ山周辺を採掘地として指摘されています。地形・地質上異なる 2 つの特性から、土砂の採掘と施工の実態を明らかにした好例と言えるのではないのでしょうか（当センター報告第 290 集（2014）『品川台場（第五）遺跡』、同第 301 集（2015）『品川台場（第五）遺跡 2』）。（大八木謙司）【追悼】長年にわたり当センターで分析にあたられてきた上條朝宏さんが 4 月 17 日に急逝されました。この場を借りて感謝と心よりのご冥福をお祈りします。

# いま あの遺跡は現在！？ Vol.9

## — 町田市小山ヶ丘四丁目 多摩ニュータウン No.248 遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。

このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。

もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

町田市小山ヶ丘。現在の京王相模原線多摩境駅周辺の開発は、多摩ニュータウン開発の終盤頃に当たります。今回紹介する多摩ニュータウン No.248 遺跡（以降 No.248 遺跡）は 1990 年から 1991 年にかけて発掘調査が行われました。

現在の多摩境駅から小山内裏公園の入口までは、比較的平坦な道程ですが、開発以前は公園から延びる丘陵の斜面地でした。その斜面を大規模に切土造成して現在の街が作られています（多摩境駅北側が切り通しで南側が高架になっていることから、その様子が分かります）。No.248 遺跡はこの斜面上、多摩境駅北西から徒歩数分の場所にありました。

No.248 遺跡の調査では、縄文時代の粘土の採掘跡が見つかっています。縄文人にとって生活に欠かせない土器ですが、その材料となる粘土をどのように調達していたのかについては、発掘例がほとんど無く、よく分かっていませんでした。No.248 遺跡は国内最大規模の例として注目されました。

また、この粘土は非常に良質であり、縄文時代の後も、採取が行われ続けました。古代にはこの粘土から瓦の生産が行われました。No.248 遺跡内のセイカチクボ瓦窯跡では、武蔵国分寺出土の瓦と同文様のものが見つかっており、この地で国分寺瓦が作られたことが分かりました。（武内 啓）

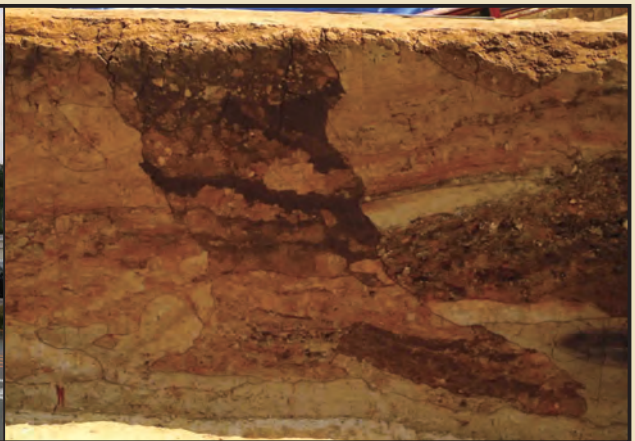


写真 1 : No. 248 遺跡周辺を小山白山公園付近から望む（左写真）。縄文時代の粘土採掘坑が見つかったのは正面のマンション裏手付近、小山内裏公園の西展望台の下付近に当たる。右写真は粘土採掘坑の断面の様子を撮影したもの。竪坑を掘り、粘土を採掘していた様子が、土層の堆積などから分かる。

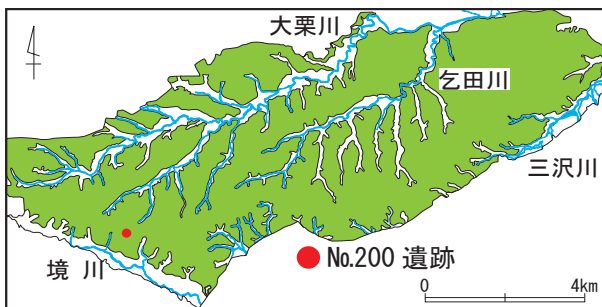


写真 2 : No. 248 遺跡から採取された粘土（左写真）。縄文時代だけでなく、古代の瓦の生産にも使用され、周辺の人々の生業を支えていた。埋蔵文化財センターの土器作りではこの粘土を用いた土器作り教室が行われている（右写真）。

No.200 遺跡は、町田市尾根の緑道こと戦車道路（旧軍時代の戦車類運行試験場）沿いに、隣接する町田市小山町 16 号 2068（現小山ヶ丘 1-9）付近にあたります。この緑道脇の頂から南斜面に展開した 19000 m<sup>2</sup>程の遺跡です。現在は、緑道と立体交差する南多摩尾根幹線道路となっています。発掘調査は、昭和 63 年 4 月から同 64 年 1 月末の 1 次調査に続き平成 7 年 4 月から同 8 年 3 月まで隣接の NO.201 遺跡を含めて、2 次・3 次調査が進められました。3 回の調査で、次の成果がありました。

縄文時代早期前半期では、集落跡が発見され、同期の燃系土器や局部磨製石斧・礫器など石器類が多数出土しています。縄文時代早期後半期も、集落跡の発見と同期の炉穴や陥し穴土坑が多数発見され、貝殻条痕土器や石器類が出土しています。

縄文時代から隔たった古墳時代 4 世紀前半頃は、集落跡と首長墓とされる方形に溝を掘った方形周溝墓が複数発見され、多摩ニュータウン調査で数少ない発見となりました。成果の中から縄文時代早期について紹介します。



No. 200 遺跡の位置

多摩丘陵の南側を流れる境川から北側に展開する丘陵線沿いは、No.200 遺跡を含め、縄文時代早期前半・後半期の遺跡が集中し、生活条件に適した立地であった事が窺えます。

縄文時代早期前半は、20 軒を超える住居跡が確認されています。この住居跡の中には隅丸長方形の大型住居跡 7 軒が含まれ、出土している燃系土器から時期差（井草式→稲荷台式）のあることが判ってきました。時期を経て次第に住居の大型化が

進むと考えられていましたが、本遺跡では、すでに井草式の段階で、長辺 8 m を越える長楕円もしくは隅丸長方形の大型住居跡（64 号住居跡）が発見されています。隆盛期の稲荷台式では、8m 前後の隅丸長方形の大型住居跡 5 軒・方形住居跡 1 軒が、

南向き斜面の懐部分で発見されています。隅丸長方形の大型住居はいずれも住居内に炉跡が発見された事が特筆されます。早期前半期の定住化が進むとされる中で、多摩ニュータウン No.52 遺跡の炉跡の発見例も含め、住居内に炉を設けた

初期段階と考えています。調査を回想すると 1 次調査で発見された焼土跡を複数伴う小型住居跡の一部は、造りから推測して、大型住居跡に伴った施設と考える必然性があると言えそうです。



64 号住居跡

縄文時代早期後半は、丘陵頂部付近に炉穴 120 基以上が、斜面下に陥し穴土坑が 80 基発見されています。この炉穴群至近の斜面地から発見された早期後半の炉跡を設けた住居跡 8 軒が目目されます。群集する炉穴の発見は、昭和 40 年頃の港北ニュータウン遺跡調査の集積事例から、狩場である陥し穴土坑群と炉穴群が、対比して考えられて来ました。移動が想定される狩場内や炉穴の生産活動の場に、定住と結びつく遺跡に、なかなか恵まれませんでした。発見された複数の住居跡は、炉穴群や陥し穴土坑群とともに居住を背景にした生産活動が展開されている事を示しています。縄文時代早期を通して定住化は、着々と進んで行きます。

今日、縄文時代早期の定住化は、一般的な認識となっていますが、発掘当時は手探りの状態でした。

（田中純男）

# 1 / 1964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

# 30 多摩ニュータウン No. 200 遺跡

『南多摩発見伝 丘陵人の宝もの』 現代に生きる里山文化

多摩ニュータウン建設直前の多摩丘陵には江戸時代から続く村落とそこに生きる人々の暮らしがありました。谷戸(谷部)には小さな水田が作られました。谷戸の湧水は冷たいため、水はいったん谷頭に溜めてから田んぼに回します。丘陵の斜面は畑に、頂部には炭焼きのためのクヌギやコナラが植えられました。現在、私たちが郷愁の念をこめて「里山」と呼ぶ景観は、このようにして出来上がりました。江戸時代中期頃のことと考えられます。

里山は手付かずの森ではなく、逆にそこで生活する人々が絶えず自然に対して干渉し続けることで成り立っていました。現在の多摩丘陵でも鬱蒼とした常緑樹林が見られますが、これは人々が自然の管理を放棄した結果にすぎません。製炭用の落葉樹は定期的に伐採され、下草も日常的に刈られていたため、以前の多摩丘陵の林は思いのほか明るく、樹木も赤松などの大木を除けば、低木が多かったようです。

このように、地形に代表される自然環境を、大きく損なうことなく利用する人々の生活態度は縄文時代以来のものですが、現在私たちが生活する多摩ニュータウンは、縄文時代以来の生活の基盤であった丘陵地形そのものや、江戸時代以来の里山文化を大きく改変して建設されました。しかし、建設直前まで続いていた人々の生活文化の痕跡は、現在でもわずかですが、見ることが出来ます。

写真 1 は多摩市内で確認されている双体道祖神です。道祖神は密集地帯である神奈川県も境川を越えて東京都に入るととたんに稀な存在になります。



写真1 双体道祖神

道の辻や村の入り口などに建てられ、悪霊を防ぐと言われていました。「セイの神」とも呼ばれ、現在でも小正月のドンド焼の際には道祖神の前に人々が集まります。この像は袖中合掌のいわゆる相模型で、神奈川県方面からの強い影響が見受

けられます。造立は寛保元(1741)年ですが、市内には平成 21 (2009) 年造立のものもあります。

写真 2 は庚申塔です。六臂の青面金剛、頭上左右に太陽と月、雌雄の鶏、見ざる、言わざる、聞かざるの三猿、足下の邪鬼など多くの要素がそろっています。60日に一度の庚申の日の夜は、睡眠中、体内の三尸の虫が抜け出し本人の悪事を天帝に告げ口するので、人々はこれを防ぐため神仏に祈り、夜を徹して飲食や世間話などをしました。その信仰の供養塔が庚申塔で、多摩市内では 42 基が確認されています。市内のある地域では現在でも念仏講が続いているようです。この像は享保 8 (1723) 年の造立です。なお、この日に生まれた子供は将来大泥棒になると言われていますが、名前に「金」を入れれば大丈夫ということで、庚申の日に生まれた夏目漱石の本名は夏目金之助と言います。



写真2 庚申塔

写真 3 は丸彫形の馬頭観音です。かろうじて「明王馬口印」が認められる点、台石に「馬」の字が見えることで馬頭観音だと分かります。文政二(1819)年の造立です。本来は威力をもって苦悩を取り除き人々を救う菩薩ですが、江戸時代後半頃からは主に馬に関係する人々が、馬に対する信仰や供養として建てました。近代に入ってから引き継ぎ建てられ、今まで多摩市内では 31 基が確認されています。車社会到来以前、坂道の多かった多摩丘陵では、多くの農家が馬を飼っていました。最近、新たに、平成 26 (2014) 年造立の「馬頭観音」文字塔を見つけました。(福田敏一)



写真3 馬頭観音

